

日本の平和 蜚気楼

日本の平和 蜚気楼

「戦争での利益誰かの命奪う」

三原則撤廃衝撃 「9条誇り 関心を」

戦争を語る体験者は減り、若い人らは国の行方をトップ任せにしている。テレビのバラエティ番組などで活躍するイラン人女優のサヘル・ローズさんは、そんな日本の現状が気がかりだ。イラクとの戦争で、家族全員を失った。「国に関心をもち、誇りを持ってほしい。よりどころになるのは憲法九条ではないか」。戦争を「人が目の前で死ぬ現実」として知る二十八歳は、そう訴える。

(安藤莉子)

「憲法九条をノーベル平和賞にという提議が受理される中で政府は武器を売ろうとしている。今の政治はアンバランス」。四月中旬、東京都内の大学で開かれたイベントで、ローズさんは若い学生らに語りかけた。

イラク国境に近い港町に生まれ、四歳の時の空襲で、両親と十人のきょうだいを失った。ローズさんも重傷。孤児院で三年間を過ごし、戦場だけが人を捜すボランティアをしていた大学生のフローラさんに、

養子として引き取られた。両親から養子を反対されたフローラさんは、日本の知人を頼ってローズさんと海を渡ったが、仕事がなく、なかつからず、二人で公園の土管に寝泊まりした時期も。ローズさんを支えた

のは「生き残ったことには理由がある。自信を持ちなさい」と励ましてくれたフローラさんの言葉だった。女優への道を歩み出した今も、月一回のペースで、学生らへの講演や、児童養護施設の訪問を続けている。

イラン出身女優
サヘル・ローズさん



イラン・イラク戦争
石油輸出の要所とされる国境のシャトルアラブ川の領有をめぐり、イラク軍が1980年9月、イスラム革命で混乱するイランを攻撃し、8年間に及ぶ全面戦争に発展した。四国は88年8月、国連安全保障理事会の決議を受け入れ停戦合意したが、両国の死者は数十万人とされる。イラクの経済的疲弊は、90年のクウェート侵攻の引き金となった。

「今の日本の平和は、まるで蜚気楼のよう。戦争を知らない若い世代が過去の戦争責任を負うのは難しいけれど、九条を守り、平和を守り続けることは世界への誠意になる。もうこれ以上、私のような思いをする子を増やさないで」

る。「私は戦争を伝えるため、生かされたから」
日本政府が武器輸出三原則の撤廃を決めたことは衝撃だった。「貧しい人に教育を受けさせず、武器を与えることが戦争の本質。戦争で誰かが利益を得れば、命を落とす人がいる」
家族を失った心の傷はいまも消えない。美しい火花が上がる八月は苦手だ。「爆発音と振動が空爆を思い出させるから」。ジェットコースターの騒音は、逃げ惑う人々の声と重なり、がれきに押しつぶされた記憶を呼び覚ます。
体験してない人には理解されにくいから、人に話さないという気持ちはよく分かる。でも、日本の戦争体験者が言えないまま高齢化していくことに、社会に発する響きが小さくなっていってしまうのではと懸念する。